様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　４月２０日現在

機関番号：17102
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2011
課題番号：20520021
研究課題名（和文）２０世紀の形而上学（ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）

研究課題名（英文）Metaphysics in 20th century (Heidegger, Wittgenstein, Einstein)

研究代表者
細川　亮一（HOSOKAWA RYOICHI）
九州大学・人文科学研究院・教授
研究者番号：10091208

研究分野：西洋近代・現代哲学
科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
キーワード：形而上学

１．研究計画の概要

２０世紀の思想を、ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタインを中心にして、形而上学という視点から捉え直す。形而上学という視点は、２０世紀の思想をギリシア哲学以来の伝統のうちに位置づけることを可能にする。

２．研究の進捗状況

ハイデガーから出発して、「形而上学」の意味を確定する。プラトン『国家』、アリストテレス『形而上学』、そしてカント『純粋理性批判』の解釈を通して、形而上学が「自然学を超えて」と「存在論ー神学の二重性」。という二つの基本的な意味をもっていることを確認した。ハイデガーにおいてだけでなく、ウィトゲンシュタインとアインシュタインが語る形而上学もまた、この意味において理解することが一つの課題となる。

ハイデガーとアインシュタインの関わりを形而上学という視点から捉える。ハイデガーは「変換に対する不変量論」というアインシュタインの相対性理論の基本性格を正しく把握していたし、アインシュタインのうちに「自然の数学的企投」という存在の次元を見出していた。この次元は「自然学を超えて」という形而上学の意味に対応するが、アインシュタインはそこに「人間精神の自由な創造」（概念創造説）を見ていた。さらに「物理学は一種の形而上学である」（アインシュタイン）と「アリストテレスの『自然学』は後に形而上学と呼ばれるものの根本書である」（ハイデガー）とを結び付けることによって、ギリシア形而上学以来の問題（自然学ー形而上学）へ導かれる。

ウィトゲンシュタイン『論考』が「自然学を超えて」と「存在論ー神学の二重性」という二つの意味において形而上学であることを示す。そしてウィトゲンシュタインのハイデガー形而上学への共感、そしてハイデガーのウィトゲンシュタインへの言及を検討し、両者の出会いが形而上学という問題圏であることが明らかとなる。

アインシュタインが語る形而上学も「自然学を超えて」と「存在論ー神学の二重性」という意味で理解できる。このことを「自然のうちで自己を顕現する理性」というアインシュタインの言葉に定位して示すことができる。

３．現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタインの三人が、シュリック、カルナップなどの論理実証主義といかに関係したかをさらに調べる必要がある。

４．今後の研究の推進方策

２０世紀の形而上学がカント哲学といかに関係しているかは、重要な視点を形成するだろう。ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタインがカントをどう捉えたかが、新しい問題として生じてきた。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３　件）
① 細川亮一、「普遍的法則になることを意志しうる」、『哲学年報』、無、７０輯、2011, pp. 99-131
② 細川亮一、「最高善の促進は要請である」、『哲学年報』、無、６９輯、2010, pp. 83-111
③ 細川亮一、「コペルニクス的転回」、『哲学年報』、無、６８輯、2009, pp. 73-107

〔図書〕（計１　件）
細川亮一、九州大学出版会、『道化師ツァラトゥストラの黙示録』、2010, 276 頁、